参考資料：「利他のこころ」「いのちの大切さ」を高野山・和歌山から世界につたえるオブジェの制作コンセプト

和歌山県が擁する高野山は、連綿と営まれてきた仏教美術の殿堂です。さらなる発展と継承には、その魅力や価値の発信は不可欠でしょう。文化は人の手のみならず、その場固有の風土が支えるものであり、山々や流れる水も共にこの地の思想を育んできたといえましょう。マンダラプロジェクトで行う展示では、和歌山の自然・地理と文化とを併せて紹介することで高野に代表される和歌山の魅力を包括的にお伝えしたく考えています。

蓮華が閉じた状態

本展示の要は、蓮華をかたどったオブジェ作品です。観光分野で行われてきている、メディアを使った具体的な情報発信のほかに、こうした芸術方面からのアプローチを行うことで、来場者それぞれの見方に任せた、つまり各人の感性に基づく魅力の発見を促進します。ご自身なりに和歌山の魅力に気づき、ご興味をふかめ足を運んでいただく一助を目指して展示を企画しております。

©マンダラプロジェクト

マンダラプロジェクトでは和歌山の精神性を代表する空海の理念の実践を多角的に試みています。空海の功績の１つとして挙げられますのは、当時のインド・中国の仏教思想を体系化したうえで独自解釈を加え、自他区分を超越した関係性をめぐる議論を拡充させた、その新規性にあります。これに倣い、展示予定のオブジェにおいても、現代であればこその新規表現を取り入れつつ、空海の思想の感覚的把握および視覚化に挑んでおります。

オブジェでは、空海の思想のキーワードとなる「自利利他」と「重々帝網」を重視しデザインを行いました。空海著『即身成仏義』では「重々帝網なるを即身と名づく」とあり、一般的にこの大意は「自己はあらゆる他者と重重無尽の関係の上になりたち存在している」と解釈されます。こうした密な繋がりのなかにあることを自覚し、互いが自らとともに他も満たす、自利利他の精神を実践できたならば世に円満な関係性が拡がり行くのではないでしょうか。そしてこのメッセージは、オブジェの機構によって示唆されるようになっています。来場者がともに協力し動作させることで、自らの行為が周囲に影響を与え、また与えられる、相互に波及する関係になりたつことを感じていただけるはずです。

オブジェの機構につきましては、高野山の六角経蔵と同じように、法輪部分を来場者が協力して回すことで蓮華がひらく仕組みで、すなわち来場者の参加があってこそ完成に至るものとなっています。仏教のシンボルである蓮華がひらく様子は、視界が開け、悟りを開く暗喩です。機構を動かすことで蓮華のシルエットが変化したり、鑑賞者の視点が移動したりすることでその刹那ごとに目に映る姿を変え続け、常に変化し固有のものはない「空」を示すほか、来場者は皆がオブジェ完成に不可欠な存在であることは衆生の尊重を示し「一切衆生悉有仏性」へ繋がるもので、デザインには仏教の根幹理念も盛り込んでいます。

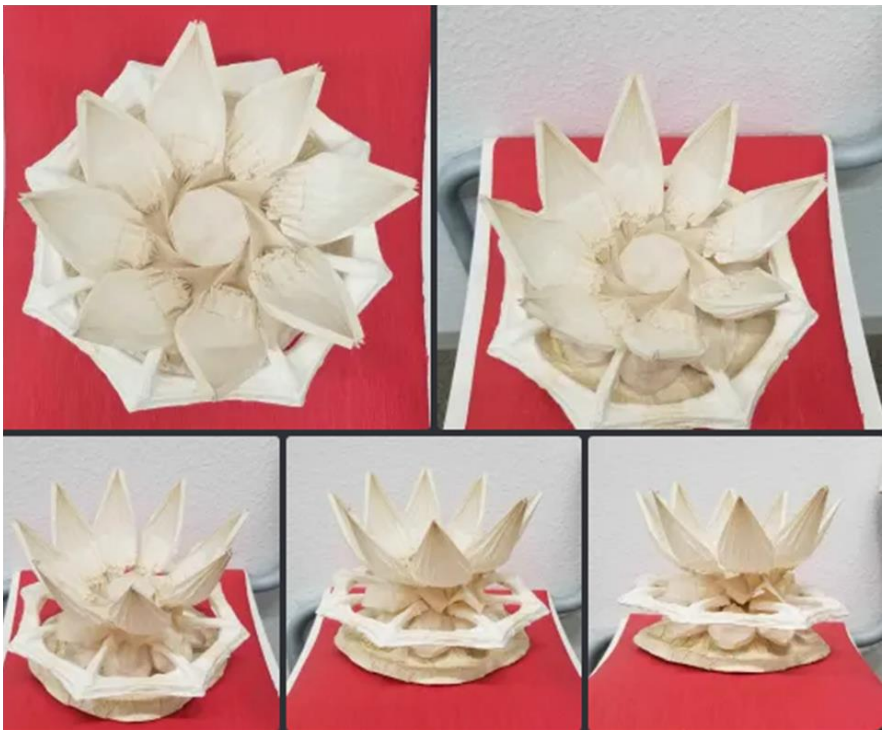
模型（試作段階）はオブジェの素描的段階をしめすものにとどまり、実際の制作では一層のブラッシュアップが行われますが、意匠に関して触れていきますと、蓮の葉のうえに蓮華座を置き、折り紙で作られた蓮華の周りを法輪が囲む、という構成をとります。いま模型には表されていませんが、折り紙の蓮華内部には、胎蔵曼荼

©マンダラプロジェクト

羅中央の大日如来と如来を囲む諸仏諸菩薩をなぞらえ、空海展でも使用されたクリスタルガラスを配置する予定です。またオブジェは上方からみると八葉の形をとりますが、これも胎蔵曼荼羅の中心部の中台八葉院を意識しています。蓮は仏像の台座や持物を連想させるのに加え、蓮華自体、古代ギリシャ美術から東漸してきたとされるモチーフでもあり、時代や地域を超えて受け入れられやすい普遍性があるという点から、非仏教文化圏の方々にもご興味を持っていただきやすい間口の広いモチーフといえます。

蓮華が開いた状態１

蓮華が開いた状態２



©マンダラプロジェクト

オブジェ表面は、和歌山の伝統工芸品の１つに数えられる和紙で覆います。オブジェは会場において採光部の下に配置されますが、光の透過時に和紙がみせる、柔らかに拡散する光は、みほとけの慈光を視覚化するのにまたとない素材です。オブジェの主素材を和紙とすることは概念を表すのに最適なだけでなく、改めて和紙の美点を示す機会でもあります。また、オブジェのデザインのみならず、高野の自然や文化を材質の面から象徴しコンセプトの補強を狙います。

そして折り紙の蓮華からは、１枚の紙から自在に形作ることができる和紙のポテンシャルと施された技巧とに驚き楽しんでいただけると期待します。折りには、宇宙産業や医療工学で活用されている特殊な技法を取り入れ、仏教理念と自然科学との古今の智慧の融合をみることができるでしょう。日本文化の紹介場面において折り鶴も度々目にするようになり、折り紙が日本文化として浸透しつつあるなかで、その文化の深さにも意識を向けていただけると思います。

このように本オブジェは、仏教思想と和歌山ひいては日本の文化や技術を発信しうる要素で構築した、過去・現在・未来、三世の永き時間軸の貫くコンセプトに基づくものであり、「未来社会の実験場」たる大阪万博の方針に沿う展示物にもなっております。

かつてない人流の最中にある現代では、非仏教文化圏の方々にもご興味を抱きやすいようひらかれた表現を行うべく、仏教芸術的な具象度は和らげながらも、素材と意匠によって日本や仏教「らしさ」も保てるものと考えます。オブジェを通して、即身成仏や自利利他といった概念を、馴染みのない仏教学のこと、といった遠い出来事でなく自分ごとに捉え直してもらう契機となれれば、そして興味を深め和歌山へ赴きたくなるような関心へ繋げられればと願います。

今年 2024 年はちょうど「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界文化遺産登録され 20 周年にあたるアニバーサリーイヤーであります。オブジェのごとく、皆の手で、和歌山を中心とした伝統と文化の華がこれから先も、より大輪を咲かせていけるようお力添えいただければ幸甚です。

©マンダラプロジェクト